黒崎・三重地区のキリシタン遺産

黒崎・永田地区は長崎市の北西部。長崎駅から国道202号線を車で走り、新長崎魚港そばから三重地区を通過すると海岸から山手に広がる。かつては大村藩領と佐賀藩領が混在した。早くからキリシタン布教が行われ、多くの信徒が居住していた。しかしキリシタンの迫害時代は過酷な弾圧が行われた。信徒の多くが五島へと移住していった。今でもキリシタン遺跡は各地で見られる。

永田町のキリシタン遺跡

向道上墓地（上段部）

永田浜バス停から海岸線を南に進んだ丘陵の中腹。ちょうど永田湿原公園を北に見下ろす所にある。墓地はゆるい段々状になっており５段に分かれている。最上段から３段までは苔むした小型の立竿和型石碑が２基あるのみで、他は野石を積み寄せて直方体を形作ったものが40基残っている。

向道上墓地（上段）

この直方体の真ん中に薄い板状の野石を立てた非常に珍しい野石墓がある。半数は崩れかけているが、18基は板石が立っている。真ん中に立てられた薄板石は和型石碑の立竿を意識したものなのか、畝刈の垣内墓地にあるキリシタン墓碑と言われるものと同様に板石を立てたタイプなのか興味が尽きない。計測した２例を示すと、Ａ基　直方体

の横107㎝、縦72㎝、高さ45㎝で板石の突起は30㎝。Ｂ基　直方体の横120㎝、縦77㎝、高さ39㎝、で板石の突起は28㎝ある。

４段目には墓は見られない。５段目には外海地方特有の平蓋式が２基ある。大きさはほぼ同じで横120㎝、縦50㎝、高さ35㎝である。また、立竿和型石碑が８基あり、その中の４基の立竿にはそれぞれに洗礼名や死亡年月日、建立年などが読める。

幕藩時代には永田町の大部分が大村藩に属していたが、ここ向道上付近は佐賀藩深堀領に属していた。佐賀藩領ではキリシタン宗門の取り締まりは大村藩ほど厳しくはなかった。このためこのような特徴を持つ墓碑が残ったのではないかと思われる。

立て竿を持つ野石積み寄せ墓（直方体）は、墓地管理者によると「調査に来られた大学の先生の話では明治６年以前の墓碑」という。建立は幕末なのか江戸時代初期のものかは想像をかきたてられるところである。これらの墓のほとんどが無縁の墓と思われる。良く保存されている墓碑も多いが、野生動物による被害も進んでいる。貴重な墓碑だけに大切に保存したいものである。

向道上墓地（民家の横）

向道上の同じ斜面を約20ｍ下がった所にある。墓地管理者の話によると明治以前にできたとみられる向道上墓地①が手狭になったためこの地に移ったという。ここも野石を積み上げたり、平らな石を載せたりしている墓碑が多い。野石は近くの海岸から運んできたり、地区内にある平らな石の地層から採取した（墓地管理者）。

向道上墓地（民家横）

墓地内には現代的な墓碑や仏教の墓碑も見られるようになった。それとは対照的に、野石を積んだ昔ながらの墓碑は守る親族がいなくなったのか崩れるままになっている。

貝ノ首墓地

国道202号線で三重地区から仏の平展望所を通過すると永田町に入る。約200m下ると左側に車寄せ場がある。ここは旧駕籠立て場（峠の茶屋）跡であり、山手に貝ノ首墓地がある。

貝ノ首墓地

よく整備された墓所で納骨式が目立つ。しかし、よく観察すると無縁になった自然石の墓もかなり目立つ。具体的には納骨式は34基、土葬墓は25基で、昭和50年代以降に土葬から火葬に進んだようだ。一方、無縁の墓は19基、仏式36基、カトリック式23基で計78基を数えた。国道が整備されたとき墓碑を改装移転することはなかった。

この中に十字を彫った墓碑で「元治二年正月廿九日　享年四十五才」が目を引いた。残念なことに洗礼名、建立年は刻印されていないのか目視できなかった。しかし、元治２年正月といえば大浦天主堂が完成した約１か月前に当たる。バスチャンの予言に希望を持ちながら生きた人がいたことを示していると思い計測した。これと全く同型の墓碑がほかに３基見つかったが苔むしていて文字などは判読できなかった。

下黒崎町のキリシタン遺跡

永田町から海岸沿いをさらに進むと下黒崎町。黒崎川を挟んで丘陵地に開け、河口左岸に黒崎港がある。遠藤周作の作品「沈黙」で黒崎の名は全国に紹介され、町を訪れる人は多い。また、丘陵の枯松神社はキリシタン神社として知られる。

キリシタン関連遺跡として町内に18カ所ある墓地から３カ所を選んで紹介する。

黒崎教会霊園

バス停「教会霊園前」から右手の急坂を登ると、黒崎教会霊園が大

十字架を中心に広がる。1962年（昭和37）に整備され、1975年（昭和50）に再拡張された。規模は243区画あり壮大である。大十字架からは黒崎地区の町並みが見渡せてすばらしい景観が楽しめる。

黒崎教会霊園

その中心部には煉瓦造りの黒崎教会建設に奔走しながらも完成を目前にして病死した岩永信平神父の墓がある。岩永神父は30年間この地で信仰指導と布教活動をされ1920年（大正９）６月17日に亡くなった。

神父の遺言でこの地に埋葬されている。岩永神父は大浦のラテン神学校で学び、1887年（明治20）大浦天主堂で司祭（神父）に認められた２期生４人の中の一人であった。

城の平墓地（下黒崎町宮田）

黒崎川の河口右岸にある。柏木神社の鳥居を左へ進み、すぐの墓碑から左に入る。海岸へ抜ける木立の中の道を上下に挟んでおんじゃく（温石・結晶片岩）の平蓋長墓が散乱している。廃棄されているようにも見えるが、11基は、はっきり墓と判断できた。ほかの10数基は形が崩れているが、墓だったことはすぐわかる。無縁の墓でいつごろ作られたものか全く手掛かりがつかめなかった。

城の平墓地

また、入って来た道を戻り墓碑からさらに約10m登り墓碑から左に入ると木立の中にも温石を用いた平蓋長墓が広がる。ここの長墓は大きな長方形になっている。

柏木神社

外海町誌（昭和49年発行）によれば、佐賀藩支配地（黒崎、出津、

樫山、永田）の鎮守として1746年（延享3）宮田の地に勧請された。勧請したのは深堀の神官で、大山津見神を祀り、例大祭は旧９月19日である。鳥居は1837年（天保８）の建立で19人の寄進者名が刻印されている。鳥居の石材は、深堀神社の鳥居と同じように、肥料として使う干鰯（ほしか）を関西方面に売り行き、その帰りに購入したものであると伝わっている。

柏木神社の鳥居

枯松墓地（枯松神社の右手脇）

サンジワン様と呼ばれた外国人宣教師を祀る枯松神社の周辺には旧キリシタンの墓が数多くあり、松本地区の共同墓地となっていた。温石を用いた平蓋長墓が大半だったようで、モデルとして参道わきに点々と残されている。

枯松墓地

外海総合公園の造成にともない墓地が移転することになり神社の右手脇が選ばれた。整然と区画された新しい墓地は1991年（平成３）７月建立に始まり今日に至っている。目を引くのは「三界萬霊供養塔」と、戒名に混じって旧キリシタン時代の洗礼名が20人分刻印されていることである。例えば、バシチャン、ドメイゴス、ジチリーナ、ルジーナなどである。また、建立者は松を用いた苗字が多いことには驚かされる。

石碑の建立者はすべて樫山・天福寺の檀家だが、先祖の信仰を尊重しつつ各個人の精神を大切に守っていることが表れていると思った。

（野﨑　圓）

参考文献

『外海町誌』　旧外海町　1974年

黒崎伝十と娘カシ

大村藩領外海の黒崎一家は先祖代々の熱心なキリシタン信仰者であった。1790年（寛政２）「浦上一番崩れ」のとき、内海の戸根頭（現琴海戸根町）で殉死した助左衛門という信徒がいた。その子が繰右衛門、次が平五郎で、その子が平三郎。平三郎は７年間も大村の牢に入って苦しみ、出牢後は五島に移った。

平三郎には男子がなく、娘フクの婿養子に迎えたのが黒崎伝十（ガスパル伝十）である。

黒崎家墓碑

1868年（明治元）11月、伝十ら親族が集まって浦上一本木の伝道師から教えを聞いていた。そこに現れたのは宗門目付（キリシタン監視役）の久松兵四郎である。見張り役であった伝十の娘カシはすぐに伝十らに知らせ、なんとか中の人たちを逃がした。しかし後で兵四郎は下男の住助を買収し、この日集まった人の名と話の様子を聞き取ってしまった。また、兵四郎は上黒崎の源次方の風呂に来て、枕の引き出しから祈り（オラショ）を書いた紙を盗み取って帰ってしまった。

1869年（明治２）、ガスパル伝十ら12人は三重の横目役所に呼びだされ、そのまま大村本小路の牢に送り込まれた。そこでは棄教を迫る算木責めのひどい拷問を受けた。残された家族も、郷民から暴言や瓦はずしなどの迫害を受けた。

翌年には伝十の妻フク、カシ、弟の佐六ら14、５人が大村小姓小路の唐人牢につながれた。冬の真最中、食物もわずかで、その寒さやひもじさに気を失うものもいた。

フク、カシらが入牢してからさらに残された子供たち（伝十の家には８歳と５歳の娘、ほかにも男女の幼児がいた）も、食事を奪われたり、家の中のものや畑の作物などを略奪されるなどの迫害を受けた。

大村牢に入ってから120日過ぎると、男たちと若い女性たちは大村藩の家臣の家で働かされことになった。カシは、峰登弥という武士の家に使われることになり、蔭ひなたなく、まめまめしく働いた。その働きぶりは機智に富み、忠義者と呼ばれることもあり、峰家の家族からも喜ばれた。カシの行動は美しい愛のこころを持って周囲の人たちに感動を与え、長く信頼を得て、人と人との絆を築いていった。

参考文献　（小嶺昭典）

『外海町誌』　外海町役場　1974年

枯松神社祭

枯松神社祭

長崎市外海地区下黒崎の枯松神社で毎年、神社祭がおこなわれている。神社の祭りととらえれば、ほかの地区の神社祭と変わりがないが、この神社はキリシタン弾圧の時代にこの地区で信者たちを指導した外国人宣教師サン・ジワンを祀っており、特異な祭りといえる。

この神社は地域の人に「枯れ松さん」とも呼ばれ親しまれている。この地区では1873年（明治６）のキリシタン禁制高札の撤去（解禁）後、それまでのかくれキリシタン信徒はそのままカトリック信徒になったり、仏教徒になったり、先祖の意志を継承するかくれキリシタンに分かれた。

2000年（平成12）、当時のカトリック黒崎教会・司祭野下千年神父の呼びかけでこの神社祭が始まった。そこにはカトリック信徒、仏教徒、かくれキリシタンの三者が一堂に集まり、迫害時代に先祖が潜伏しながらサン・ジワンを心の支えとして信仰を貫き通したことに感謝し、顕彰している。こうした三者が宗派を超え一体となった祭りも全国的にも異例だ。

2014年（平成26）の15回となる神社祭は11月３日に行われた。約100人が参列。同教会の大山繁主任司祭や曹洞宗天福寺の塩屋秀見住職のあいさつや講演があった。ミサでは花束、お神酒、献金がささげられた。また今なおかくれキリシタンの村上茂則さんら２人が口伝の「オラショ」（祈り）を唱えた。

枯松神社と祭礼について研究している南山大学のバンジラ氏も講演。また、おりしも長崎を視察していたバチカン図書館長チェーザレ・ペシニーニ氏も立ち寄り、祭りの様子を視察するなど神社祭は世界的にも知られるようになってきた。　（野﨑　圓、原田正敏）

次兵衛岩

次兵衛岩

長崎市外海町の「県民の森」から少し南側に行った山中に洞窟がある。「次兵衛岩」と呼ばれ、金鍔次兵衛神父（修道名トマス・サン・アウグスチノ）が隠れていた場所といわれる。

次兵衛神父は大村に生まれ。有馬のセミナリヨで神学を学び、1614年（慶長19）にマカオに追放された。マニラに渡りアウグスチノ会に入り、日本に戻って司牧（信徒を導く）した。役人の厳しい取り締まりで一カ所に落ち着くことはなく、武士や農民、漁師などに扮しながら各地を転々とした。1635年（寛永12）この岩に潜伏しているところを密告されて翌年捕えられ、西坂の丘で殉教した。35歳だった。

次兵衛岩は隠れ家としてキリシタンの古老らによって伝えられていたが時代の流れでその存在さえも忘れ去られていた。黒崎教会の元信徒代表、山崎政行さんはキリシタンの古老らから聞き取りしながら広大な山中を歩き回り、８年がかりで発見した。次兵衛神父を福者にする宗教裁判のときは、山崎さんは一般の代表として物的証人に選ばれた。

次兵衛岩を訪ねる

長崎市中心部から国道202号線を北上し、県道57号線で神浦ダムに向かう。

県道を６㎞程走ると右手に看板が立っており脇には登山用の杖が用意されている。

この小道を入ってしばらく下ったところに３台ほどの駐車スペースがある。写真の奥の山の方に次兵衛岩はある。ここから一時間程で行くことができる。

初めは道も平らで歩きやすかったが、沢伝いに歩くにつれて苔で湿った岩は滑りやすく、足に余計な力が入って通常の登山に比べると疲れる。

道の途中には行き先を示す看板が数多く立っていて道に迷うことはない。

次兵衛神父は追っ手の目を避けるために、日が沈みまた昇る間の暗闇の中この山中を歩いていたのだろう。

一時間程歩くとルルドが見えてくる。ここまで来ると次兵衛岩はすぐそこにある。右手に十字架を持つ次兵衛神父像の脇には十字架の刻まれた鍔が付いた刀が置かれていた。

（川口将智）

参考文献

『先駆者　先祖の足跡を訪ねて』山崎政行著　バスカの里史跡顕彰会
2001年２月５日

子捨川（こすてごう）

長崎市から国道202号線を北上すると、旧外海町との境界付近に迫害時代の悲劇が伝わる「子捨川」と呼ばれる所がある。

大村藩領の外海地区はキリシタン大名の大村純忠の庇護によってキリスト教が広まった。だが、出津、黒崎などは山の傾斜がきつい上、平地も少なく、海岸は切り立つ崖が続く。

外海地区の地図

こうした地形から領民の生活は苦しかった。それに、純忠の息子の大村喜前以降は厳しくキリシタンを弾圧した。

迫害時代、大村藩は藩財政の安定を図るため人口抑制として長男だけを残す「間引き」を強制した。隠れて育てても人別改めで発覚するなど取り締まりは厳しいものだった。そんなとき、夜にこの「子捨川」の高い崖から海岸へ自分の子を投げ落としたという。こうした過酷な弾圧が、外海地区の信徒たちが五島各地へ移住する要因ともなった。地元の長老によると、移住の際、この子捨川近くに船を寄せ、手を合わせて船出したともいわれる。

（平山次男）

参考文献

『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』　長崎県世界遺産登録推進室
『先駆者　先祖の足跡を訪ねて』「バスカの里史跡顕彰会」
（山崎政行代表）2001年

黒崎教会の建設にまつわる逸話

黒崎の海岸から国道202号線を山手に進むと、大きく左に曲がると、丘の上にレンガ造りの教会がある。黒崎教会。急な階段をのぼると、正面にマリア像が迎える。切妻の平屋建てで、外壁のレンガが夕日に映えて美しい。この重厚な教会の建設にあたって、地元には強い信仰をあらわす逸話が今も語り継がれている。

教会の建設はド・ロ神父が計画したといわれ、1897年（明治30）から始まった。3年後に教会用地ができた。その後聖堂建設に着手したが、資金難で一時中断することもあったという。1920年（大正9）に竣工、着工から23年ぶりに信徒の念願がかなった。

黒崎教会

黒崎地区も海岸からすぐ急峻な山が続き、耕作地に乏しい。農民は斜面を切り開いて作物を作っていた。だが、よりどころとなる教会建設は信徒たちの悲願だった。長老（元信徒会長）がこんな話をしてくれた。建設資金は信徒が苦労して作った芋やかんころもちを売って積み立てたという。

長老の父は当時、労働奉仕で建設工事の陣頭指揮を執った。外壁のレンガや材木などの建設資材はほとんど地区外から船で運び込んだ。「レンガ船が来たぞ」と知らせがあると信徒総がかりで教会に運んだ。あるとき、台風が襲来した。網元だった父がかじ取る運搬船は押し寄せる大波で今にも転覆しそうになった。「神のおぼしめしなら」と祈った。すると船は転覆を免れ、三重地区の海岸付近まで流されたが無事だった。

黒崎の曲りの浜と永田浜の海岸一帯は岩礁や大きな石ばかりで建設

資材となる砂は全くない。ところが、台風一過、浜には大量の砂が押し寄せ、教会の建設には大いに役立ったという。

黒崎教会は世界遺産候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の中には含まれていない。しかし、同じ外海地区で構成遺産の対象になっている出津教会堂と関連施設は見学客が増加しており、黒崎教会もその効果で見学客の姿も目立ち始めた。　　（中島吉盛、山口篤史）

樫山地区のキリシタン遺跡

西樫山の隠れキリシタン

三重樫山は、低い山に囲まれた小盆地であり、居住地域は東西南北約600ｍに現在200戸程度の集落が集中的に形成されている。南北を走るバス道路筋が東西樫山のおおよその境界線であり、江戸時代、東樫山は佐賀藩深堀領、西樫山は大村藩領であった。この狭い土地に東樫山と西樫山が密集して一つの集落を形成しているにもかかわらず、東と西の住人同士の付き合いはほとんどなかったのである。東西とも大半の住人は潜伏キリシタンであったが、キリシタン禁止令の中、高札によるキリシタンの密告制度や連帯責任、相互監視を基本にした五人組制度等を設けられたため、自分たち家族の身の安全を図るには付き合いを制限するしかなかった。領主が違う東と西の樫山の住民同士の付き合いが疎遠になるのは当然であった。

藩境石

大村藩はキリスト教に関して領民に特に厳しく対処し、絵踏みをすることもあった。また、郷土史家松川隆治によると、西樫山の住人の中には大村藩の参勤交代にも参列するような役人もいて、東樫山のよ

うにキリシタンの組織を構成することは困難であったため、西樫山の潜伏キリシタンは、おらしょの習得や洗礼の授受に関してうまく伝承されず、一部には、東樫山の指導者から密かに教えを請うたこともあったという、東西の関係は全くの拒絶状態ではなかったようだ。また、西樫山の潜伏キリシタンは日繰りなどの行事についても伝承されてなかったため、キリシタンとして熱心でなかったように言われるが、厳しい状況の中、指導者も無く、ただ密かに先祖の教えを守り耐え抜くことしかできなかったのである。

西樫山の住民は大村藩領民だったことから、藩政策により五島への移住の歴史があり、主に浜串、葛島など中五島へ移住したようである。

寺請制度により西樫山の住民の一部は法華宗、その他多くは真宗正林寺の檀家として表向き仏教徒であった。明治以降、信仰の自由となった際、7戸がカトリック教徒となり、現在は10数戸がキリスト教を信仰している。そのほか多くの住民は引き続き正林寺の檀家として残ったが、実際は潜伏キリシタンの要素を多分にもった仏教徒であった。寺とのかかわりは葬式のみの付き合いであったため、正林寺自体も西樫山の檀家数を把握できていなかった。2009年（平成21）正林寺の石垣修復工事があった後、西樫山自治会からの寄付金があり、2012年（平成24）寺の調査で109軒の檀家があることがようやく判明できた。西樫山の檀家と正林寺の関係が如何に希薄であったかが窺われる。

西樫山墓地

西樫山の墓地の多くは仏教様式の墓で占められているが、カトリック教徒の墓もあり、中には１軒の家の仏教様式の墓に戒名と洗礼名が刻まれた墓もある。そのほか、かつてはキリシタン墓地であったかと思われる石積みの墓も各所に点在し、生花などが手向けてあった。

西樫山には、1897年（明治30）黒崎教会の岩永神父によって樫山修道院が設立され、1966年（昭和41）まで存続した。1924年（大正13）には、樫山教会が献堂され、黒崎教会の巡回教会として西樫山の信徒等の礼拝が月１回行われている。

樫山教会

東樫山と赤岳

「岩屋山に三度登れば、樫山に一度お参りしたことになり、そして樫山に三度登ればローマにお参りしたのと同じ」と浦上のキリシタンは樫山の赤岳を崇拝していた。赤岳は海上から見ると山の形が少し変わった断崖絶壁の山であり、浦上から仰ぐ岩屋山は前面が絶壁、片面はなだらかな斜面と、この二つの山は周りの山々と比較すると不可思議な形状をしており、神秘性を持った山である。このためか、キリシタンたちは密かに信仰のために登り続けた。

樫山赤岳

茂重の顕彰碑

茂重の墓

樫山には外海地方のキリスト教を布教したバスチャンの伝説があり、赤岳の山麓には、十字を印したという椿が霊木として信仰の対象とされてきたが、1856年（安政３）浦上のキリシタンが捕えられた浦上３番崩れと呼ばれる事件が起きた際、古くから浦上と繋がりがあった東樫山のキリシタンは、役人が来て、その椿の木を切り倒すのではないかと恐れ、その前に自分たちの手でその木を切倒してしまった。その木は、さらに小さく切られ、東樫山のキリシタンたちにそれぞれ配布され、今でも大切にされている。この３番崩れの時に、浦上のキリシタンである孫蔵は隠し持っていたマリア像やメダイなどを探索されるのではないかと恐れ、東樫山の茂重に預けたが、役人の厳しい拷問にあい、自白してしまった。しかし、茂重は佐賀の牢に捕えられ後も、最後まで口を割ることもなく牢死した。その茂重の顕彰碑は、赤岳の麓の大神宮の敷地にあり、墓は東樫山の墓地にある。

また、現在の皇大神宮は天照大神を祀っているが、かつては弁財天が祀られていた。これも浦上３番崩れの時に、佐賀藩深堀領主がキリシタンに関係があると疑い、天照大神に差し替え勧進させたものである。この弁財天は実はキリシタンの殉教者７人を祀ったものであった。

（八木久雄）

樫山皇大神宮

参考文献

『長崎隠れキリシタン記』　長崎談叢42号～46号　正木慶文著
昭和39年～41年

『長崎市三重地区の郷土誌』　長崎市三重地区郷土誌編纂著
アロー印刷　平成25年

『滑石公民館講座「長崎の魅力再発見」樫山地区の大村藩、
佐賀藩深堀領堺石についてのテキスト』　松川隆治　平成26年

東樫山のカクレキリシタンと天福寺

天福寺1624年（寛永元）創建

三重樫山地区のキリシタンは、道を隔てて西樫山と東樫山とに分かれている。それは、西樫山は大村藩であり、東樫山は佐賀藩深堀領で、大村藩の中の飛地であったためだ。西樫山のキリシタンは早くからキリスト教やその他に改宗する人も多かったが、東樫山はさほど厳しく取締りをされることはなかったので長くキリシタンとして生活することができた。長崎は天領であるため、浦上などは大変厳しかった。大村藩からはたくさんの人たちが五島へ行ったが、このあたりの東樫山の人たちで五島へ行った人はいない。

東樫山を調査するにあたり、天福寺のご住職にお話を伺った。

東樫山地区には、指導者がいたため長くキリシタンとしての生活を続けることができた。また、このあたりでは踏絵もなかった。東樫山のキリシタンが誰ひとりとしてキリスト教やその他に改宗しなかったのは、天福寺があったからだ。

オラショ本

早くに改宗した者がそうしなかった者たちを、隠れキリシタンと呼んでいた。隠れとは彼らを邪宗門呼ばわりした言葉で、異端者扱いしていた。

佐賀藩は彼らが、非人道的な扱いをされないよう、天福寺を作って見逃していた。

お寺に所属しないものは人間らしい扱いを受けない。

当時の葬儀は仏式で行われていたが、寺の中で住職がお経をあげるものの、寺の外では経消しのオラショを唱えていた。

蚊焼の岳路には、樫山から移り住んだと思われる。三重樫山・外海から善長へ、そして岳路へと移り住んだのではないだろうか。この地区の言葉と同じものがあるということだ。また、お盆にはお饅頭を作る。禅宗のお寺では念仏をあげないのだが、この地区の人々は15日夜、男ばかり集まって念仏をあげる。キリシタンでは、女性は祈りの場には入れてもらえない。また自分たちは仏教徒だとカモフラージュのため鳴らし物を鳴らしながら念仏をあげる。

キリスト教では、先祖をまつることはなく神様に祈りを捧げるが、仏教は先祖を大切にする。仏教徒は仮の姿だったが、日本人なので、キリシタンではあっても先祖は大切にしたい。その思いがキリスト教に改宗しなかった理由のひとつとも言われている。そして檀家としておおめに見てくれた天福寺に感謝の気持ちからでもある。

オラショを唱え、先祖を見送っていたようで1970年代まで続いたそうだ。だが、口伝えで伝えられたためオラショの意味も今ではよくわからない。始まりは聖書だろうが、口伝えに伝わるうちに変わっていった。

だんだんと受け継いでいく人がいなくなっていった。食べ物の中にも食べてはいけないものなどの制限があったようだ。（縫い物をしてはいけない、たまごを食べてはいけないなど）

キリシタンの墓は、海から運んだ平たい石を四角に積んでいく（高さ70～80㎝まで）。それが天福寺上にはいまも少し残っている。

秘密が外部に漏れないように、外部からはあまり人を入れなかった。結婚もそうで、だんだん弊害も出てきた。外部から嫁にきた人は葬儀には入れず排除された（泣かないメジロ、「つーたん」と呼ばれた）。

樫山や外海地区では、洗礼のことをみつめという。クリスチャンネームのように、洗礼をしてくれた人の名前がついている。みつめとは、

生まれて3日目に受洗することになっているので3日目という日数に由来するのではないかと言われている。

全国に散らばるキリシタンは、禅宗が多いという。また、禅宗はお寺が認めたものがご本尊、お寺を開いた人となっていたりするとのこと。

そのおおらかさが、潜伏キリシタンを認めることができたのかもしれない。

仏教、キリスト教が混じり合ってこれまで250年ものあいだお互いの信仰を守ってこられたのは日本人のお互いを思う心、認める心（曖昧さ、グレーゾーン）を持っているからだ。だから250年も潜伏し、長くキリシタンとして生活していられたということを教えていただいた。

（松本奈美）

参考文献

『長崎隠れキリシタン記』　正木慶文
『隠れキリシタンと天福寺』　曹洞宗天福寺